

YS-11 よりも 40 年前に日本初の旅客機を作った「墜落王」は川西村でスタートアップした

日本の航空機開発と小林一三の住宅地開発の謎？ の関係

1922年に日本初の旅客機である「天竜10号」を製造した福長浅雄氏。戦後初の国産航空機YS-11の初飛行(1962年)を40年もさかのぼる偉業であった。我が国航空史の偉人である浅雄は、出身地の静岡県内でさかんに顕彰されている。しかし、既に忘れ去られているが、浅雄は川西村(現・兵庫県川西市)にも足跡を残している。『川西市史』第3巻236ページに「…大正7年8月11日、川西村出身の民間飛行家福永朝吉が猪名川小花河原から豊中グラウンドまで複葉機で飛行するというので、川西村で福永の後援会がつくられ、当日は多数の観衆がおしかけて離陸を見送った」と書かれている。しかし、現在の川西においてこの事実はすでに忘れ去られている。なぜ彼は川西で空を飛んだのか？ 失われた謎を追うと、新たな事実(?)が浮かび上がった。

福長浅雄氏とは

浅雄氏は生涯で70回以上墜落し、自らを「墜落王」と称した。

福長浅雄氏はM26(1893)年、静岡県浜名郡飯田村(現・浜松市)に生まれた。少年期から飛行機に興味を持ち、T8(1919)年、同県磐田郡掛塚町(現・磐田市)に福長飛行機研究所を設立、同時に福長飛行場を整備し、飛行機の製作を開始した。その後、株式会社福長飛行機製作所を設立し、日本初の旅客機である天竜10号を製造した。さらに飛行士の養成にも努めた。S55(1980)没。

(注)浅雄氏の姓は本来は「福長」であったが「福永」も使われていた。また、名は出生時は「朝雄」であったが、役場が火事で戸籍が焼けた再製された時に誤って「浅雄」にされた。なお、「浅吉」の名は、川西市史の記事の出典である大阪朝日新聞T7年8月12日付の記事にのみ見られる。



浅雄氏のことは多くの書籍に書かれている。また、本田宗一郎氏(ホンダ)や鈴木道雄氏(スズキ)らと並ぶ、ものづくりのまち・浜松を代表する人物の一人であり、母校の浜松市立飯田小学校には記念のモニュメントや展示コーナーが設けられている。



浅雄少年、静岡から川西へ

高等小学校を卒業した浅雄少年は地元の天竜製材会社で製材の技術を磨き、独立のために兵庫県川辺郡川西村(現・川西市)に移り、16歳で福長製材所を設立した。川西を選んだのは、大消費地に近いことや、近くに山が多く材木にする木を入手しやすいことが理由であった。

当時は手挽きによる製材が主流であったが、浅雄氏は動力による製材機械をドイツから輸入し、効率性を高めた。また、発生するおが屑を使ってボイラーで湯を沸かし、風呂屋を開業して近所の人に喜ばれた。

R6年9月に浅雄氏の親族である福長利晴氏・昇氏・利廣氏・昌巳氏にお会いしてお話を伺ったところ、晩年の浅雄氏から聞いた話として「福長製材所は、箕面有馬電気鉄道の住宅地開発に材木を供給して大いに儲かった。」「その住宅地は富裕層向けの別荘地だった」との証言を得た。



左から、福長利廣氏、昌巳氏、利晴氏(99)、昇氏

念願の大空へ飛び立つ

M43(1910)、東京・代々木練兵場で徳川大尉が日本人として初の飛行を成し遂げたことを伝える新聞記事を読んだ17歳の浅雄少年は、自分も飛行機を操縦して空を飛ぶことを決意した。製材所の仕事に精を出して資金を貯め、T3(1914)年に初めての飛行機・天竜1号を自ら製作した。その後、上京して飛行機の操縦を学ぶと同時に、飛行機の製作を続けた。飛行術をマスターした浅雄氏はT7年、故郷の天竜川河川敷で郷土訪問飛行を行い、約4万人の観衆が集まった。その中には当時12歳の本田宗一郎氏もいた。



天竜川河川敷で凱旋飛行を披露した福長浅雄氏(T8年)



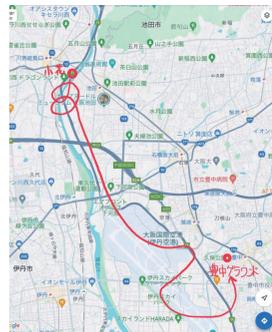
現在の天竜川河川敷「福永飛行場跡」(静岡県磐田市掛塚)



天竜3号(福長昇氏提供)



小花の猪名川河川敷から離陸する福長浅雄氏の天竜3号(福長昇氏提供)



新聞記事から推定した飛行経路

製材所発展の陰に小林一三氏?

それとも国塚磨氏?

求ム! 情報

T10(1921)発行の『池田町便覧』に福長製材所の広告が掲載されている。また、T14(1925)農商務省発行の『民設製材工場一覧』には、福長製材所が「T2年4月創立/従業員4人/1箇年資材消費高3,000石」とある。さらに、『航空殉職録』には「…兵庫県川辺郡(川)西村小戸福長製材所…」との記述があるのを見つけた。しかし、現在の川西市内の製材業関係者に問い合わせたが、福長製材所を知っている方はおられなかった。



『民設製材工場一覧』

『航空殉職録』

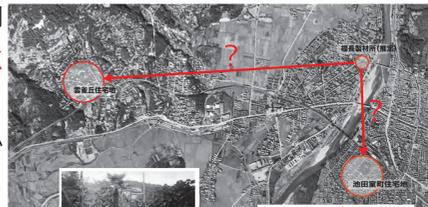
求ム! 情報



『池田町便覧』より

箕面有馬電気鉄道が開発した住宅地といえば「池田室町住宅地」が思い浮かぶが、同住宅地は大阪市内に勤めるサラリーマン層が主な販売対象だった。また、同鉄道沿線の富裕層向けの別荘地としては、宝塚市の「雲雀丘住宅地」があるが、開発開始がT5(1916)年でやや遅く、開発事業者は同電鉄とは別である。この点は今後の調査を待つ必要がある。なお、浅雄氏の秘書を務めた利廣氏は「浅雄から小林一三の名は聞かなかった」と言っておられた。

求ム! 情報



川西村で凱旋飛行、しかし墜落

『大阪朝日新聞』大正7(1918)年8月12日夕刊
豊中着陸の際 機体破壊/福永氏は無事

民間飛行家福永朝吉氏は、出身地兵庫県川辺郡川西村小花河原より府下阪神急行沿線豊中グラウンド間の往復飛行を11日午前8時より舉行することとなり、未明より複葉トラ(1行不明)より起こる●手の声に透られ、轟然たる花火を合圖に南に向かって滑走70メートルで離陸し、池田町川西村の上空を2周した後豊中に向かって300メートルの高度にて飛行した。朝から曇りだったが風はなく、絶好の飛行日和だった。豊中で(1行不明)松林の上に機影を現し、東に半円形を描いて急角度の着陸をしようとしたが、着陸場が狭隘だったので遂行できず、再び西方に向かって南に回転して南方の建造物の屋根上より北に向かって急角度の着陸を行ったはずみにプロペラ(1行不明)3間を走って機首を地中に突込み、機は逆立ちとなって転覆した。

幸い福永氏は負傷なかったが、機体や右翼、吸入管、冷却器等を破損したので、直ちに解体し手東京に向け発送し修繕を行い、來たる9月中旬に再度の飛行を行うことと…(以下不明)

福長浅雄氏が高価な飛行機を手に入れられたのは、川西村での製材業の成功によることがわかりましたが、まだまだ不明な部分があります。郷土の偉人の再評価のために、さらなる情報をお待ちしています

求ム! 情報

私たちマチノキオクカンは、ちょっと古い写真や8ミリ、ビデオテープ、地図、チラシ、ポスターなど、街の記憶を伝える史料をデジタル・アーカイブし、これからのまちづくりに共有できるシステムを民設民営で構築しています。

みんなで作る街のアーカイブ

マチノキオクカン